

## 『パリ大劇場の舞台衣装と年譜』

教授（西洋服装史） 辻 ますみ

フランスの18世紀ファッションといえばブルボン王朝の華やかな宮廷衣装で代表されるのが一般的だが、実際には70年代後半以後の流行の発信源はパリの街に移っており、宮廷衣装はむしろ急速に保守化していた。当時のファッションプレートを見ても女性のドレスの種類が増えているだけでなく、度々変わるドレスの装飾やヘアスタイルに付けられた名称が評判になった芝居や役者に関連している場合が多く、また明らかに演劇界からの影響を受けたと思われる異国的なドレスも登場している。フランス革命前後の活気あるパリの流行の動きを促えるには、演劇界の舞台衣装を無視するわけにはいかない。コメディ・フランセーズで喝采を浴びた俳優たちはどのような衣装で登場していたのだろうか。

こうした疑問に答えてくれるのが当時出版された演劇雑誌である。『パリ大劇場の舞台衣装と年譜』は1786年4月から1789年11月まで発刊された同名の週刊演劇誌を、各年ごとに4巻本にまとめたものであり、フランス革命に翻弄される直前のコメディ・フランセーズの状況を伝える貴重な資料になっている。フランス座やイタリア座で評判になった演目を毎回取り上げて、ストーリー展開や俳優の演技について評論し、見せ場の台詞を紹介するのが主な内容だが、人気俳優の彩色プレートを添えて舞台衣装にも焦点を当てているところがユニークである。

初刊から3号までは名優ルカン（1729-78）、悲劇女優ローワール（1756-1815）、喜劇役者プレヴィル（1721-99）など、そうそうたるベテラン役者を並べてコメディ・フランセーズの来歴を示し、

4号で人気女優ルイズ・コンタ（1760-1813）を登場させている。コンタはポーマルシエの「フィガロの結婚」の初演（1784年）以来シュザンヌ役を演じ、容姿の繊細さと演技の軽妙さで大評判になった女優である。貴族にとっては危険な内容を含んでいたにも関わらず「フィガロの結婚」は大当たりし、彼女の舞台衣装からシュザンヌ風ヘアスタイルやフィガロ風ジャケットが数年にわたって流行している。（図1は1786年上演時の衣装）また「パヤールの恋」でランドン夫人を演じた際の記事は“古いも若きもコンタを褒めそやし、若い女性はランドン風ボンネットをかぶり始めている”



図1 コンタ(Contat)「フィガロの結婚」より1786年

と伝えている(1巻23号)。パリの街の流行がいかに演劇と深く関連していたかを教えてくれる格好の例である。

人気男優には、二枚目男優モレ(1734-1802)、喜劇役者のデュガゾン(1746-1809)らがいた。モレはコメディ・フランセーズのアイドル的存在であり、モリエールの「人間嫌い」、ヴォルテールの「ザイール」、モンヴェルの「無愛想な恋人」(図2)で演じた時の衣装がプレートになっている。モレの熱い演技がいかに作品を魅力的にし客を引きつけているかという評論(2巻20号)が彼の人気のほどを語っている。各号は平均して約8ページ前後、これにプレートが一枚、時には歌の楽譜がつく。プレートの下絵はLe Balbier, Duplessis-Dutertre, Desraisなど、版画はJaninet, Phelippaux, Chapuisらである。年間48号を刊行しているが、89年は32号で終わっている。

「舞台衣装論」は1786年20号から現れるが、ページ数が増えていくのは88年以後である。ちょう



図2 モレ(Molé)「無愛想な恋人」より1787年

ど演劇衣装の改革論が広まっていた時代でもあり、舞台衣装の効果と正しい時代考証のあり方を具体的に提案することがこの「舞台衣装論」の目的になっている。当時は一般に、悲劇は古代ギリシアか古代ローマの衣装、喜劇には異国的衣装や農民の服装または当時の流行衣装を用いることにほぼ決まっていた。俳優たちは古文書や絵画を参考にし、場面を考えて画家にデッサンを描かせて衣装を作らせていたが、なかにはフォヴァール夫人のように、「三人のトルコ王妃」の役のためにイスタンブールで衣装を仕立てさせて本物を売り物にした俳優もいた(1巻14号)。だが往々にして俳優のドラマチックな役柄を引き立たせるために大げさに飾ってみたり、妙な組み合わせの衣装に不自然な身振りが伴う例が多かった。

「舞台衣装論」に取り上げられたのは、主としてギリシア神話の英雄や古代ローマの皇帝や市民や兵士であり、オリエントの王や異国の衣装にも及んでいる。風俗風習を含め細部の装飾に至るまでできるだけ正確に考証した結果は、プレートに描写されている。おそらくポンペイの発掘やギリシア半島への考古学調査が可能になったことが、古代衣装の考察に影響を与えたのであろう。材料を簡素にし宝飾類を排除したところに新しい古代衣装の解釈が現れている。衣装の真実性と演技の単純化を主張し実行したのは名優タルマ(1763-1826)であるが、タルマが活躍を始めるのはこの雑誌の後のフランス革命時代になる。なお衣装論のなかに、日本の秀吉をテーマにした悲劇作品から想定した衣装が「3人の日本人」というタイトルのプレート(Gravelot画)に描かれている(4巻1号)。東洋風な衣装は正確とはいえないが、演劇作品の対象になった時代や地域の広さに驚く。

欧文書名: Costumes et annales des grands théâtres de Paris. 1786-89, 4vols. K771. 8-C-4  
Colas 716 Hiler p.195